

漢法苞徳塾資料	No. 521
区分	診断
タイトル	診察手順
著者	八木素萌
作成日	

## I. 診察手順

### 1. 診察手法

#### a. 八虚診

主として広い意味での五臓の反応、僅かに病因反応も含まれる。

#### b. 募穴診

12臓腑の陽性の反応を主として反映している。

#### c. 臍傍診

広い意味での五臓変動を反映表現する、故に、かなりの割合で病因反応も現わす。

#### d. 側腹診

右側腹は痰を、左側腹は食飲を示しているが、この反応のみで結論してしまうのは軽率のそしりを免れない。痰の場合ならば、璇璣・華蓋・紫宮などの圧痛反応と肺および中焦の熱を診る必要があり、また、虚火に伴う水の虧損（主に口乾・口燥・唇焦・虚火に由来するノボセ・咽喉の渴乾燥・しかも引飲しない）も診ることが必要。つまり、実熱・陽熱に由来するものか、虚火のためのものか、この診別が重要である。

#### e. 一般腹診（参考一夢分流）

臓腑の変動を診る。

#### f. 経絡触診（経絡診）

各経絡の代表的な触診点を診る。

#### g. 望診（蒙色・運動観察・形態観察・舌）

蒙色では病因・変動臓・病態を。運動観察では変動経を主に把握。形態観察では異常の状態および程度と体質の五態を。舌では苔の状況からは、主として消化管を中心に陽気および冷熱の状況を候がい、唾液の様子や口蓋粘膜の状況で、津液の多寡そして温涼や熱や瘀を診、舌質は主に肉の充実程度・血の清濁や瘀血などを診る。

## h. 背候診（候背診）

背腧穴、脊椎の状況、肉付き、色調などで判断する。

## i. 手掌手背（掌・甲）診

内傷と外感の診別、掌の色合い等で内臓の温涼や腸胃の冷熱などを診、手甲の皮膚がシッカリしているかどうかで体調の強弱を診、その静脈の状態は貧血があるか否かなどの情報をもたらす。

## j. 運動診・動作診

主に経絡的な変動・異常を診る。閉目起立反射と頸の全方向運動を主とする。これらは主に陽経の反応を現わしている。他には必要と判断した動作を診る。

2. 病因の確認、変動している臓腑・経絡の確認、病因に対応している反応と、病態に対応している反応の確認を行う。同時に六経〈三陰三陽〉の変化状況＝主要な治療対象は、六経の中では何れであるのかを把握する。時季〈春・夏・長夏・秋・冬〉の掌握。
3. 仰臥位では、a/b/c/e/fの大部分、gの大部分、iが行われる。  
伏臥位では、hとgおよびjの他動的な部分と自動的な一部分が行われる。  
その他、立位でjの大部分が行われる。

## II. 病因確定の方法と手順

- (イ) 八虚診は主として五蔵・五行の判断に用いるが、同時に、やや病因の五行的な反応も含まれているので、この点も留意して他の要素と勘案して判断決定の予備的情報としておく。
  - (ロ) 臍傍診で変動しているところを五行的に確認する。かなりの程度、病因反応をも表現している。
  - (ハ) それに関連する陽経の変動を診る。病因には、外界からの変動の影響が大きな意味をもっている。故に、内傷病であろうとも、この「外界からの変動の影響」という側面はしっかり把握しておくことが大切である。
- (ニ) 陽経の要穴の最大反応点を確認、病因の中心と、変動経＝身体反応の軸をも示すので、治療選経と取穴上、大きな意味を帯びている。
  - (ホ) 募穴の最大反応点を確認、外感病因の判定と、変動している府・陽経を把握する。

- (へ) 臍傍の最大反応点に関連性が深い陽経の原穴ないしは自穴に「試し刺」して体の変化を見る。治療的な経絡運用の中軸をなしているものと、ドーゼの判断に有用である。
- (ト) 病症の消長を、
- a) 〈最悪期〉〈安定期〉〈良好期〉が如何なる季節であるか？または、
  - b) 一日の内の如何なる時間帯であるか？
- 〈平旦・午前・日中・午後＝日昃・日没・夜半〉を確認する。
- 〔註 a は春・夏・長夏・秋・冬に病は如何なる期にあるかを診、  
b は一日を六分して年の六分に対比する。〕
- (チ) 発病・罹患の時期の確認。これは、病因・病蔵府の判断に有効である。
- (リ) 閉目起立反射は足の陽経の変動を非常に短時間で把握できる。前に倒れそうになるのは陽明、後ろに倒れそうになるのは太陽もしくは督脈、横に倒れそうになるのは少陽と診る。手の陽経の変動は、首の全方向運動の違和を見ることによって把握できる。前後屈は太陽、振り返り動作では陽明、左倒屈・右倒屈は少陽と診る。
- (ヌ) 陽の反応・府の反応は、陰の反応・蔵の反応よりも強いが、微弱で判り難いのは、陰の反応・蔵の反応と理解して治療を組み立てる訳である。この場合は、先述したように陰・蔵の病症として、痰・飲・瘀・労・虚火などを病理的産生物に変化していると捉えて、それを診定する必要がある。
- 「痰」は肺における津液の不足が無くてはならない訳であるが、その背景には具体的な身虚のための津液の枯渇、冷えのための停滞、虚火による奪液、虚汗や、熱症状のための脱水などがある。また脾の機能の一部として飲食の吸収と飲食の精の敷布という働きがあり、津液の全身への正常な代謝を主る水蔵府とならんで、脾胃の重要性が論じられている。浮腫の治療にも脾の役割の重要性が言われている。それで「肺は貯痰の器・脾胃は造痰の基」とも言われる。「労」は玄府の開闔を主る蔵〈腎陰〉の力を削いで行くため、虚汗＝自汗や盗汗により津液が失われる。故に、肺・脾胃・三焦・腎・膀胱などと、腹部振水音とともに反応が良く示される中庭の圧痛や豊隆・足陽関など、口内の湿潤度（口に水が湧くように昇って来る）、および左季肋部の状態などから「飲」を診る。「飲」がさらに濃縮されて「痰」となる。したがって豊隆・下巨虚と右季肋部の様子のほか、手陽明の陽谿、璇璣・華蓋・紫宮などの三穴の圧痛、その他で診る。
- 「瘀血」は下腹部の瘀血診察部や燥屎反応部や、皮膚がザラついてゴワゴワしている甲錯や肥厚やフケなど、また舌質や歯齦の色、皮下の瘀血の鬱滞による悪色などで診る。
- 「労」は気虚の倦怠であるが、やつれ＝憔悴・自汗・寝汗・気分の沈滞などに伴って、主に下肢胃経の激しい凝りが診られることが多い。

## III. 治療と配穴の原理的なもの

- (1) 「風」の病は春の気〈初之気〉に感作したもの  
 「熱」の病は夏の気〈二之気〉に感作したもの  
 「暑〔相火〕」の病は長夏〔前半〕の気〈三之気〉に感作したもの  
 「湿」の病は長夏〔後半〕の気〈四之気〉に感作したもの  
 「燥」の病は秋の気〈五之気〉に感作したもの  
 「寒」の病は冬の気〈終之気〉に感作したもの

- (2) 〈初之気〉を主るのは風木の足厥陰肝の気  
 〈二之気〉を主るのは熱火の手少陰心の気  
 〈三之気〉を主るのは暑相火の手厥陰心包の気  
 〈四之気〉を主るのは湿土の足太陰脾の気  
 〈五之気〉を主るのは燥金の手陽明大腸の気または手太陰肺の気  
 〈終之気〉を主るのは寒水の足太陽膀胱の気または足少陰腎の気  
 などというように認識されている。

注目すべきことは、『儒門事親』の巻10で、季節の気に対応する病についての、基礎的な治療原理と要穴を述べていることであろう。それによると、

「風木肝酸 達鍼 与胆為表裏…主治血…肝木主動  
 治法曰 達者吐也 其高者因而越之 可刺大敦 灸亦同」〈吐法〉

「暑火心苦 発汗 与小腸為表裏…主血運諸経…  
 治法曰 熱者汗之 令其疎散也 可刺少衝 灸之亦同」〈疎散〉

「湿土脾甘 奪鍼 与胃為表裏…主肌肉…  
 治法曰 奪者瀉也 分陰陽 利水道 可刺隱白 灸亦同」〈瀉法〉

「燥金肺辛 清鍼 与大腸為表裏…外応皮毛 鼻亦行気…  
 治法曰 清者清膈 利小便 解表 可刺少商 灸亦同」〈解表〉

「寒水腎鹹 折鍼 与膀胱為表裏…主骨髓…  
 治法曰 折之謂抑之 制其衝逆 可刺湧泉 灸亦同」〈抑制〉

と記述している。

- (3) これで、〈木・風・肝〉、〈火・熱・心〉、〈土・湿・脾〉、〈金・燥・肺〉、〈水・寒・腎〉の「五蔵の基本的治療穴」に対して、すべて陰経の「井穴」を用いることができると考えていたことが判る。

ここに記述されていない陰経の〈相火・暑・心包〉と、陽経の基本的な治療穴を、如何様に推定すべきかの問題が残されている。心包については、陰蔵と同列に論じられていきているのが一般的であるから「井穴」の中衝を「基本的治療穴」として良いものと判断できる。陽経については、

---

「肝と胆」「心と小腸」「脾と胃」「肺と大腸」「腎と膀胱」など皆「表裏を為している」と述べられていることから、陰蔵との表裏関係により、陽経に対しても陰経の「井穴」を用いることができると考えていたことが判る。

- (4) こうして寒と熱の病とは「終之気」(寒・太陽寒水)と、「二之気」(熱・少陰君火)および「三之気」(暑・少陽相火)の病因に基づく病であり、また病態であることに他ならないというのが、基本的かつ基礎的な認識である。
- (5) したがって治療の際に用いる主要な経は、熱の場合には、手少陰心経・手太陽小腸経・手厥陰心包経・手少陽三焦経・足少陽胆経であり、また用いるのは各経の要穴の内でも「身熱を主る穴」つまり榮火穴や榮水穴となる。寒の場合には、寒水の経つまり足太陽膀胱経・足少陰腎経であり、また、各経の要穴の内でも「逆気して泄することを主る穴」つまり合水穴または合土穴と言うことになる。

## IV. 外感病と内傷病の診別要点表

1997.11.24 八木素萌

	外感病	内傷病
症状	明瞭で、病状の変化が激しい	不明瞭曖昧で、病状の変化も緩慢
手	手の甲（手背）に熱を帯びる	手掌に熱を帯びる
	関上の脈が 左>右 となる	関上の脈が 左<右 となる
腹部	腹部に張りがある 腹直筋の緊張がない むしろ胸脇苦満、 心下満や心下痞硬がある	腹部が全体的に虚軟であるか、 腹直筋の異常な緊張がある 少腹は虚冷である
寒熱	熱が出ても発汗しにくい	無熱か微熱で悪風し自汗する、 または、かすかな悪寒か悪熱して 自汗がある
皮膚	充実して弾力があり、さらりと しており、温度にムラがない	脆弱で薄く、何時も湿り気味な 感じであるか、乾燥している
臍傍	臍輪が明瞭 弾力がある しっかりしている	臍輪は不明瞭・不定形 弾力にムラがある 張りに乏しい
	臍の周辺に動悸がない 臍索は観察されない	臍の周辺に動悸があることが多く 緊張度が高い 臍索が遊離していることが多く、 時に痙着している
八虚反応	募穴・気会・腑会との反応が 見合っている	背腧穴・血会・臓会との反応が 見合っている

## V. 全外感病に対する経絡的治療の統合的概括

## 六経弁証による治療統合表

## 十二正経手足基本病症表

初発病時	太陽	足	頭項痛	腰脊強	悪寒	手	発熱面赤	悪風
	陽明	足	目疼	鼻乾	不得臥	手	蒸熱而渴	
	少陽	足	胸肋満痛	口苦		手	耳聾	寒熱往来
	太陰	足	腹満	自利	吐	手	口乾	津不到咽
	少陰	足	脈沈細	口燥渴		手	舌乾	不得臥
	厥陰	足	耳聾	囊縮	不知人事	手	煩満	厥逆

清・柳宝詒『温熱逢源』

## 論伏邪外発須弁六経形証：付録医悟（医略に曰うと記述）

2002.10.25 八木素萌

太陽之脈	上連風府 循腰脊	頭項痛 腰脊強
陽明之脈	挾鼻 絡于目	身熱 目疼 鼻乾 不得臥
少陽之脈	循肋 絡于耳	胸肋痛 耳聾
太陰之脈	布胃中 絡于咽	腹満 咽乾
少陰之脈	貫腎 絡于肺 繫舌本	口燥 舌乾 渴
厥陰之脈	循陰器 絡于肝	煩満 囊縮

清・柳宝詒『温熱逢源』

## 論伏邪外発須弁六経形証：付録医悟

表証	発熱	悪寒	身痛	四肢拘急	喘		
太陽経証	頭痛	項背強	脈浮 または伏				
陽明経証	目痛	鼻乾	唇焦	漱水不欲嚥	尺寸俱長		
少陽経証	耳聾	胸満	脇痛	目眩	口苦苔滑	脈弦	
半表半裏証	嘔吐	寒熱往来	頭汗	寝汗			
太陰経証	腹微満	脈沈実	自利				
少陰経証	口燥 咽乾渴	咽痛	下痢清水	目不明			
厥陰経証	少腹満	囊縮	舌卷	厥逆	消渴		
太陽府証	口渴	溺赤					
陽明府証	潮熱	譫語	狂乱	不得眠	自汗	手足汗	便閉

清・柳宝詒『温熱逢源』

## 寒熱虚実表裏陰陽弁

2002.10.25 八木素萌

寒	口不渴或仮渴而不能消水	喜飲熱湯	手足厥冷	溺清長	便溏	脈遲
熱	口渴而能消水	喜冷飲食	煩燥	溺短赤	便結	脈數
虚	多汗	腹脹時減	痛而喜按	病久	稟弱	脈虚無力
実	無汗	腹脹不減	痛而拒按	病新	稟厚	脈実有力
表	発熱	悪寒	頭痛	鼻塞	舌上無苔	脈浮
裏	潮熱	悪熱	腹痛	口燥	舌苔黄黒	脈沈
真陰不足	脈数無力	虚火時炎	口燥唇焦	内熱便結	氣逆上衝	
真陽不足	脈大無力	四肢倦怠	唇淡口和	肌冷便溏	飲食不化	

清・程国彭『医学心悟』

註：

- 仮渴…………… 偽物の渴。渴いていても飲みたがらない。
- 稟弱・稟厚…… 稟は米蔵。扶持(給料)米。ここでは消化吸収能力の強弱。
- 消水…………… 水を消化すること。
- 煩燥…………… メンタルの面でなく、縦膈に熱がある状態。胸が騒々しい、触ると微細な動きがある。
- 潮熱…………… 『漢方古方用語辞典:奥田謙蔵著漢方古方要方解説準據』(鎌田慶一郎編著)では、悪寒なく全身の熱感で、毎日ほとんど一定の時刻に出る熱。
- 舌苔黄黒……… 内臓に熱がある状態。胃潰瘍か癌の初期。

## 『靈枢』根結第5

1992.11.20 八木素萌

	形気の虚実	病気の虚実	施術の補瀉
A	有余 (実)	有余(大過)実	急ぎ之を瀉してのち其の虚実を調えよ
B	有余 (実)	不足(不及)虚	急ぎ之を補せ
C	不足 (虚)	有余(大過)実	急ぎ之を瀉せ
D	不足 (虚)	不足(不及)虚	不可刺 [甘薬もしくは気海に灸]

## 〔参考表〕

気数 月度	節気 主之	時気と特性	十二支	脈状	蔵府と経絡	六淫	刺
初之気 1月～2月	大寒～春分 厥陰風木	風 動	丑寅卯	左関：沈滑而長 一陰二陽	肝・足厥陰 胆・足少陽	風・温 相火(暑) ●	大敦
二之気 3月～4月	春分～小満 少陰君火	熱 軟	卯辰巳	左寸：浮滑而長時一沈 一陰三陽	心・手少陰 小腸・手太陽	熱・君火 ● 熱・(火) ●	少衝
三之気 5月～6月	小満～大暑 少陽相火	暑 柔	巳午未	右尺：浮而濇 一陽一陰	三焦・手少陽 心包・手厥陰	暑(相火) ● 暑熱・相火 ●	中衝
四之気 7月～8月	大暑～秋分 太陰湿土	湿 緩	未申酉	右関：長而沈濇 一陽二陰	脾・足太陰 胃・足陽明	湿・湿土 湿・燥土	隱白
五之気 9月～10月	秋分～小雪 陽明燥金	燥 斂	酉戌亥	右寸：沈濇而短時一浮 一陽三陰	大腸・手陽明 肺・手太陰	燥・燥金 ★ 燥・清金 ★	少商
終之気 11月～12月	小雪～大寒 太陽寒水	寒 堅	亥子丑	左尺：沈而滑 一陰一陽	膀胱・足太陽 腎・足少陰	寒・寒水 ★ 寒・水陰 ★	湧泉

●印は熱に、★印は寒に、病因的にも、病態的にも、蔵府・経絡的にも関連する。

『難経』4難より

病因・病蔵・脈象(49 難を中心に)

1992.6.21 八木素萌

病因 病蔵	当色 風(木) 弦脈 色に現象	悪臭 熱・暑(火) 大脈・臭に現象	喜味 勞・食・湿(土) 緩脈・味に現象	為声 傷寒(金) 濇脈・声に現象	出液 湿・液(水) 沈脈・液に現象
木 肝 主色	弦 脇下満痛 青 (正邪)	浮大－弦 身熱 脇下満痛 臊 (実邪)	緩－弦 体重嗜臥 四肢不収 脇下満痛 酸 (微邪)	濇－弦 洒洒惡寒 甚則喘咳 脇下満痛 呼 (賊邪)	沈－弦 少腹痛 足脛寒而逆 脇下満痛 泣 (虚邪)
火 心 主臭	弦－浮大 脇下満痛 身熱 赤 (虚邪)	浮大－散 身熱 煩・心痛 焦 (正邪)	緩－浮大 体重嗜臥 四肢不収 身熱 苦 (実邪)	浮大－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 身熱 言 (微邪)	沈濡－大 少腹痛 足脛寒而逆 身熱 汗 (賊邪)
土 脾 主味	弦－緩 体重嗜臥 四肢不収 脇下満痛 黄 (賊邪)	浮大－緩 体重嗜臥 四肢不収 身熱 香 (虚邪)	緩 体重嗜臥 四肢不収 甘 (正邪)	濇－緩 体重嗜臥 四肢不収 洒洒惡寒 甚則喘咳 歌 (実邪)	沈－緩 体重嗜臥 四肢不収 少腹痛 足脛寒而逆 涎 (微邪)
金 肺 主声	弦－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 脇下満痛 白 (微邪)	浮大－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 身熱 腥 (賊邪)	緩－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 体重嗜臥 四肢不収 辛 (虚邪)	濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 哭 (正邪)	沈－濇 洒洒惡寒 甚則喘咳 少腹痛 足脛寒而逆 涕 (実邪)
水 腎 主液	弦－沈 少腹痛 足脛寒而逆 脇下満痛 黒 (実邪)	大－沈濡 少腹痛 足脛寒而逆 身熱 腐 (微邪)	緩－沈 少腹痛 足脛寒而逆 体重嗜臥 四肢不収 鹹 (賊邪)	濇－沈 少腹痛 足脛寒而逆 洒洒惡寒 甚則喘咳 呻 (虚邪)	沈 少腹痛 足脛寒而逆 唾 (正邪)

註：五蔵脈状の記述は 4・5・10・13・15・49 などの諸難 五蔵色体の記述は 34・40 などの諸難